



プロローグ

春風がそよぐ、列車を待つホーム。少し人生に疲れを感じ始めた、オンナひとり旅のワタシは確かに、そこにいた。春の匂いがし、暖かさを感じ、ワタシの少し茶色い長い髪を風が撫でていた。ワタシはシマに行くための列車を待っていた。居るだけで気持ちよく、黙々と、その心地よさをひとり味わっていた。

列車が走り出し、しばらくするとトンネルの中に入った。窓の外は暗く、鉄の車輪と鉄のレールがこすれる音がトンネルの壁に響き、車内に激しい音が入り込んでくる。しかし同時に、さっきまでの静かで暖かなホームでの記憶を引き継いでいて、暗く、騒々しいこの列車の中でも、気持ちは穏やかだった。

私はそこで、違和感を覚えた。

今、この騒々しい列車に乗っているワタシの感覚と、あの穏やかな列車を待つホームにいた時の感覚、そしてしばらくするとトンネルを抜けて明るく暖かい世界に戻るだろう雰囲気予感、どれが本物なのだろう。今トンネルの中の列車にしながら、気分は春のホーム上、さらに明るいトンネルの外を予感している。暗く騒々しい列車そのものを実感しながら、同時にそれを実感していない。

この事は、日常的にも起こっているのかも？ソコにいて、ソコをそのままの形で実感していない。今、暗く騒々しい列車をそのまま感じたとしても、その一瞬は過去の記憶の一部。つまり、春のホーム上の記憶を思い起こしていることとそんなに変わらない。

ということは、この世界は、感じたことの記憶を後から再生してとらえていることになる。この世界は、記憶の束でできている。

ワタシはあの時、この世界なんか消えてしまえばいい、この世界からワタシも消えてしまえばいいと思った。そして、その記憶が失われ、それが再生されなくなった。。。そのことすら、今となっては記憶の再生。私が今この瞬間知覚しているこの世界は、単に少し前に感じた記憶が再生されているだけ。でも、記憶が再生される前、いいえ、記憶として保存される前のポイントが

あるんじゃないの？そこまで戻ることができれば。。。

考えても答えは出てこない。なぜなら、「考える」ということは、それはすぐに記憶としてインプットされ、その記憶が再生されたものを、知覚しているだけ。結局は、記憶の海に浮かんだまま。記憶よりも前、それを感じる前、考えるよりも前の状態、そこは記憶の海に投げ出される前の、島。そこに行けば、その島に居続ける事ができれば？待って、そこという場所は、考える前の場所、もともとある場所、もともといる場所じゃないの？だって、考えるのはワタシであって、考えるワタシは考える前からそこに居るはず。その島に居なかったら考え始めることもできないもの。そこにいる、私。。。

ワタシは、記憶の海のどこかに浮かんでいる島を、探す旅に出た。

シマへ

少し人生の疲れを感じ始める30歳。そんな最近のワタシは、時間とお金に余裕が出来ると、ひとり、旅に出る。いやむしろ、そのひとり旅のために、毎日会社に通い、嫌な上司に我慢し、失敗を自分の中で受け入れ、処理し、お金と時間をつくっている。

働き始めた頃は、あるイメージがあった。会社に通い、ある時、素敵な男性と出会うんだ。そして結婚して子供を産み、育てる。そんなイメージ。自分で考えたイメージじゃない。たぶん、社会からの要請があったイメージ。でもそんな機会がある度に考え過ぎて、いつの間にか疲れてしまった。

そんな日々の中、新たな楽しみを見つけた。初夏のこの週末、もう三回目となるシマへ行くことにした。暖かい海に突き出たところに、南国的なホテルと、世界の森をテーマにしたテーマパークがある。行くと決めた瞬間から、気持ちが完全に幸せモードに切り替わる。

イライラするオフィスのデスクの前で思い立ち、手は自動的に会社のパソコンのキーボードを叩きながら、頭の中はもう南国。監視されている会社のパソコンでは予約なんかできないから、個人所有のタブレットで予約を済ませた。モニターの片隅に映るメールのプレビューには、月曜日の会議の内容が書かれている。でもワタシは休むの。日曜日と平日を挟んでホテルの予約を入れている。空いてるし、安いし。だから誰にも邪魔はさせないわ。

まずは住むところから、と少し無理して借りている自宅マンションの地下駐車場から、赤い車を走らせる。車と電車、船を乗り継ぎ、リゾート地のシマに出掛ける。車で直接行くこともできる。でも私は、船に乗るルートを選ぶ。その方が気分も盛り上がるし、楽しいもの。ワタシはそこで、一人の時間を楽しむんだ。

春風がそよぐ、列車を待つホーム。春の匂いがし、暖かさを感じ、ワタシの少し茶色い長い髪を風が撫でていた。ワタシはシマに行くための列車を待っていた。居るだけで気持ちよく、黙々と、その心地よさをひとり味わっていた。

列車が走り出し、しばらくするとトンネルの中に入った。窓の外は暗く、鉄の車輪と鉄のレールがこすれる音がトンネルの壁に響き、車内に激しい音が入り込んでくる。しかし同時に、さっきまでの静かで暖かなホームでの記憶を引き継いでいて、暗く、騒々しいこの列車の中でも、気持ちは穏やかだった。もう気分は明るく暖かいシマ。暗く騒々しいトンネルの中でも、気分は明るく、晴れやかだ。いつも思うけど、何か楽しいことがこの後に控えている、直前の高揚感ってたまらない。まだ実際に楽しんでいる瞬間ではないけど、もしかしたらその瞬間以上に今の直前感の方が楽しいかも。

列車を降り、船に乗り継ぐ。小さな専用の港から出る、小さな観光船。室内のイスに座ること

なく、ワタシはデッキでカゼを受ける。太陽と雲と海。船のエンジンから出る微かな振動を足と手すりから感じながら、髪がなびくままに任せている。休日の午前の終わり頃には、何時ものように船を降りた。船着き場からホテルの入り口までは、直接石畳の広場で繋がっている。アスファルトや「歩道」はないので、船に乗って気分が高揚したままに白壁と赤い屋根のホテルに入る。エントランスホールには噴水があり、水の音につつまれている。天井は高く、大きな中庭に面した窓からは明るい日差しが差し込み、開放的な雰囲気の中に、私は溶け込もうとしていく。

世間の休日である一日目は、マイナーなリゾートとはいえ、そこそこ賑わう。主に家族連れとカップルで。そう、こういう場所の主役は、どこもファミリーとカップル。一人で来る場所ではないと、誰が決めたの？・・・ふふふ。そんなはずはないわ。一人でも十分楽しいもの。（私はそのことと戦わなければならない。その戦いにまずは勝たなければ、お一人様でのリゾートは楽しめないのだ。）

チェックインを済ませた。パークのパスをもらい、荷物は預ける。身軽になった私は、ファミリーやカップルと一緒にパークへ直行、はない。昼下がりのホテルのパティオでゆっくり過ごす。半分屋外になったテーブルで、私はサンドウィッチとカフェオレだけの簡単な昼食をとりながら、ゆったりした気分に、耽け込んでいく・・・。